

水哉園を開いた村上仏山

幼少期から勉学に励む

村上仏山は文化十年（二八一〇）十月二十五日、上稗田村で、父・村上盛之、母・お民の三男として生まれた。名は剛だが、「健平」ともいい、自らその名を最も愛した。はじめて学んだのは、文政元年（一八一八）、九歳の時、隣村・津積村の大島八幡の宮司・定村直栄の寺子屋で、習字や読み書きを習った。

次いで文政六年（二八二三）、十四歳の時、田川郡香春の徳成寺の黄鶴おうかくという僧侶について学問や道徳の基本を学び、学問の楽しみを知った。

一年後の文政七年（二八二四）、十五歳の時に筑前夜須郡（現朝倉市）秋月の原古処はるこしょの私塾、古処山堂に入門する。古処は博多の亀井塾で学んだ名高い漢詩人で、健平は古処を慕い、古処も健平の詩才を愛した。「古処」の号は秋月城下から仰ぐ「古処山」からとったもので、健平ものちに家から望む「仏山」（御所ヶ岳）を号とした。しかし、文政九年（二八二六）一月、

ID0046018

原古処は病に倒れ六十一歳で逝去した。健平が秋月にいたのは僅か二年足らずで、泣く泣く故郷に帰った。

文政十年（一八二七）、健平十八歳の二月、稗田にほど近い京都郡岩熊村（現みやこ町勝山）で巖邑堂がんゆうどうという私塾を開いている藤本平山が「原古処の長男・白圭はうけいと長女の采頻さいひんが、うちの塾で漢学や漢詩の指導をしている。あなたも来ないか」と誘い、四人の詩会が始まり力をつけてゆく。

天保元年（一八三〇）、健平二十一歳の時、京都に上り、貫名ぬきな海屋かいおくの門に入り、詩文を学び、池内大学、梁川星巖やながわせいがんらを知り、その年の十二月に帰郷。その後、芸州や長州、肥前などの学者、詩人を訪ねて詩文を学んだ。

天保三年（一八三二）「仏山」の号を使い始め、天保六年（一八三五）、二十六歳の時、私塾「水哉園」を開いた。

（村上仏山・末松謙澄顕彰会 山内公二）